

大学生の職業決定に関わる親の態度認知と 職業人イメージの要因

鹿内啓子

- 目次
- I 問題・目的
- II 方法
- III 結果
- IV 考察

I 問題・目的

青年期の発達の道筋を大まかにみると、思春期に自己意識が高まり、これまでの親の意向を取り入れて形成されてきた仮の自己を問い直し、新たに自分で自分の生き方を築き上げようと模索を始める。そして高校時代を経て、青年期後期である大学生の時期には価値観、イデオロギー、職業などの領域でコミットメントをして、アイデンティティを確立させていく。

しかし子どもの頃から受験体制に組み込まれ、今日の管理された情報化社会に生きている青年にとって、特定のイデオロギーや価値観にコミットすることは社会生活の上で必要ではなく、かえって社会への適応にとって不都合な場合もあるといえよう。下山(1990)によれば、高学歴化が進んでいる今日、子ども時代から管理された受験体制に組み込まれた青年にとって大人の管理社会は子どもの頃からなじんでいる社会であり、あらたに社会人としての人格の構造化をなしとげるためのモラトリアムは、もはや青年にとつ

て必要のないものである。

このような状況の中では、青年に残された唯一のコミットすべき領域は職業選択であるといえよう。現代社会は多様な価値観や生き方が認められる社会といわれ、一見職業選択の幅も広がっているように思われる。しかし実際には、中学・高校と偏差値で位置づけられてきた中では職業選択も学力や学歴によって規定され、選択の幅の拡大を青年自身が実感しているとはいえないであろう。このような状況では、やりたいことと就くことが可能な職業との乖離が生じてくる。そのためとりあえず可能な職業の中から意思決定するため、職を得てからわずかな期間で離職したり、あるいはこれという職業が決められないまま定職をもたないいわゆるフリーターとなる青年が増加していることが大きな社会問題となっている。しかしこのような「モラトリアム社会」といわれる中で、アイデンティティの確立の困難さを抱えながらも、職業決定は青年にとって重要な問題であり、多くの青年が模索しながら真剣に取り組んでいる。

高校生の進路決定や大学生の職業決定がどのような要因によって影響されるかについてはこれまでいくつかの研究がなされてきているが、多くはアイデンティティの確立の状態や自己効力感などの個人の内的な要因に焦点を当てて検討している。浦上(1995)は、大学生の進路選択に対する自己効力尺度を作成する過程で、これと職業不決断尺度(浦上、

キーワード：職業未決定、大学生、親の態度認知、職業人イメージ

1995)との関連を検討した。安達(2001)は、女子短大生を対象に進路選択に対する効力感→就業動機→職業未決定というモデルをパス解析によって検討している。また小久保(1998)は、職業選択へのモチベーション、自己効力感、自尊心、職業レディネス、性役割態度、不安、キャリア志向など多くの変数間の関連性をみている。

職業は自己実現の重要な手段であると同時に、人が社会的役割を果たしていく場としても大きな意味をもっている。職業がこのような社会的意味をもつものであることから、職業決定に対しては自己効力感、自尊心などのパーソナリティに関する内的な要因だけでなく、環境的・社会的な要因も大きな影響を及ぼすと考えられる。本研究では、環境要因として、青年にとって身近な職業人のモデルとなりうる親の要因を取り上げる。鹿内(2004)では、身近でしかも影響の大きい両親の要因を取り上げ、女子高校生を対象にして、自分の進路や職業に対する親の態度の認知と職業未決定状態との関連性を検討した。その結果、両者の関連性はあまりみられなかったが、親を望ましいモデルと認知していると「模索」(決定には至っていないが積極的に進路選択をしようとする態度)が高くなっていた。また親の指示的態度の強さは職業未決定尺度の「混乱」を強めていた。

このように全般的に両者の関係は弱いものであったが、その原因としては、鹿内(2004)では父親と母親別ではなく、両者を一緒にして親の態度認知として扱ったことが考えられた。とくに女子高校生にとって職業人としてモデルになる父親が異性であるためにその影響が弱かったのではないだろうか。そこで本研究では調査対象者として女子大学生と男子大学生を使い、父親と母親別に態度認知をとらえることにする。大学生は次第に親からの心理的離乳をはたす時期であるが、職業選択が重要な問題になってくるにつれて

親を職業人としてみる傾向が強くなる結果、職業未決定状態と親の態度認知との間に関連性が見出されるようになることが考えられる。また鹿内(2004)では仕事イメージと進路選択との関連性も検討したが、強い関連性はみだされなかった。仕事イメージはどのような仕事を想定するかによってかなり異なってくるであろう。そこで本研究では職業人イメージに変えて職業未決定との関連を検討する。親を職業人としてどのように認知しているかが職業人イメージに影響すると考えるからである。

Ⅱ 方 法

1. 被調査者

私立大学の2年生から4年生の大学生、女子171名、男子64名、計235名から回答が得られたが、この内、社会人の経歴をもつ者、無回答が多い者および父親または母親がいない者を分析から除いた。その結果、分析に用いたサンプル数は、女子157名、男子56名、計213名であった。

2. 調査時期および手続き

2004年4月上旬の「教育心理学」(筆者担当)の授業時に、集団実施の質問紙法で調査を実施した。所要時間は約15分であった。

3. 調査の内容

(1) 職業未決定尺度

大学生の職業意識の状態を測定するために下山(1986)によって作成された「職業未決定尺度」39項目から、鹿内(2004)においてどの因子にも負荷量が高くなかったもの、意味的に重複するものを除外し、23項目を用いた。それぞれについて自分に当てはまる程度を5段階で評定させた。使用した項目は表1の通りである。

(2) 職業人イメージ尺度

さまざまな概念の情動的意味構造を測定するために用いられるセマンティック・ディファレンシャル法 (SD 法) によって測定した。SD 法の基本次元である「評価」、「力量性」、「活動性」の3次元をそれぞれ表現し、同時に職業人のイメージの測定に適していると思われる形容詞対を18個用いた。それぞれについて、「職業人」ということばから受けるイメージに当てはまる程度を5段階で評定させた。表2に形容詞対を示した。

(3) 両親の就業状況

父親および母親それぞれの就業状況を「フルタイムで仕事をしている」、「パートタイムやアルバイトをしている」、「仕事をしていない」の3つから選択させた。

(4) 親の態度認知尺度

親の仕事や生き方についての姿勢を被調査者がどのように認知しているのか、また自分の進路について親がどのような態度をとっているのかを測定するために、鹿内 (2004) を参考にして14項目を作成した。項目の内容は表3、4の通りである。父親と母親それぞれについて、各項目の内容が自分に当てはまる程度を5段階で評定させた。

(5) 卒業後の進路希望

本学の学生の卒業後の進路として考えられるものを8個、これらに「教員志望であるが、状況によっては一般企業でもかまわない」、「その他」、「未定」を加えた11個の選択肢から、今の時点での希望進路を選択させた。

(6) 職業決定の影響因

職業 (進路) を決定する際に影響する要因として、自分の能力や適性に関するもの、親や教師その他の身近な大人に関するもの、友人や先輩に関するもの、入手する情報に関するものなど16項目を設けた。項目内容は表5の通りである。各項目について、卒業後の方向を決めるにあたって影響する程度を5段階で評定させた。

III 結果

1. 各尺度の因子構造の検討

(1) 職業未決定尺度

23項目について、「まったくあてはまらない」を1、「よくあてはまる」を5として、各評定値に1～5の得点を与えた。主因子法による因子分析を行なって固有値1以上の因子を6個抽出し、バリマックス回転をおこなった。その結果は表1の通りである。

第I因子については、「将来自分が打ち込める仕事が見つからない」で正の、「自分のやりたい職業は決まっており、今はそれを実現していく途中である」などで負の因子負荷量が高くなっていることから、職業の未決定状態を表す因子と解釈され、「未決定」因子と名付けた。第II因子は、「将来自分が働いている姿が思い浮かばない」、「職業につけたとしてもうまくやっていく自信がない」などで正の因子負荷量が高くなっている。職業決定に関してまだ混乱した状態にあることを示す内容であることから、「混乱」因子と解釈された。第III因子については、「生活が安定するなら、どのような職業でもよいと思う」と「自分を採用してくれる所なら、どのような職業でもよいと思っている」の2項目で負荷量が高いことから、「安直」因子と名付けた。第IV因子において因子負荷量の高い項目は、職業はまだ先のことである、考える意欲がわからない、真剣に考えたことがないといった内容の項目であることから、「意欲の低さ」因子と解釈された。第V因子は、職業につくことの重要性を否定したり、職業につかず好きなことをしたいという内容の項目で因子負荷量が高く、職業決定の延期を表していることから、「決定回避」因子と名付けた。第VI因子については、因子負荷量の高い項目はいずれも職業決定はまだなされていないが、その見通しをもっていたりそれに取り組む姿勢を示すものであるため、「模索」

因子と名付けた。

表1 職業未決定尺度の因子分析(主因子法・バリマックス回転)の結果

| 因子 | I | II | III | IV | V | VI | 共通性 |
|--|--------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------|
| | | | | | | | |
| 12 将来自分が打ち込める仕事が見つかっていない | 0.70 | 0.39 | 0.18 | 0.18 | 0.13 | 0.13 | 0.73 |
| 23 私は「こんな仕事をしたい」という確かなイメージを持っていない | 0.52 | 0.15 | 0.29 | 0.27 | 0.16 | 0.02 | 0.48 |
| 7 職業についての情報がまだ十分でないので、情報を集めてから決定するつもりである | 0.41 | 0.25 | 0.20 | 0.17 | -0.10 | 0.33 | 0.42 |
| 10 自分なりに考えた結果、1つの職業を選んだ | -0.65 | -0.15 | -0.14 | -0.15 | -0.01 | -0.34 | 0.60 |
| 1 自分の職業についての計画は着実に進んでいると思う | -0.75 | -0.05 | 0.00 | -0.10 | -0.20 | 0.09 | 0.62 |
| 14 私は今、自分が目指す職業につくために努力している | -0.78 | -0.11 | 0.01 | -0.17 | -0.13 | 0.14 | 0.68 |
| 5 自分のやりたい職業は決まっており、今はそれを実現していく途中である | -0.80 | -0.09 | -0.15 | -0.10 | -0.18 | -0.09 | 0.72 |
| 8 将来自分が働いている姿が思い浮かばない | 0.24 | 0.66 | 0.01 | 0.22 | 0.19 | -0.06 | 0.59 |
| 9 職業につけたとしても、うまくやっていく自信がない | 0.14 | 0.57 | 0.05 | 0.15 | 0.23 | -0.04 | 0.42 |
| 2 あらゆるものになれるような気持ちになる時と、何にもなれないのではないかという気持ちになる時がある | -0.06 | 0.42 | 0.03 | -0.01 | 0.00 | 0.19 | 0.22 |
| 6 将来、誤った職業決定をしてしまうのではないかという不安がある | 0.31 | 0.53 | 0.13 | 0.01 | 0.05 | 0.12 | 0.41 |
| 3 生活が安定するなら、どのような職業でもよいと思う | 0.24 | 0.15 | 0.85 | 0.11 | 0.05 | 0.51 | 0.78 |
| 11 自分を採用してくれる所なら、どのような職業でもよいと思っている | 0.14 | 0.10 | 0.74 | 0.19 | 0.13 | -0.10 | 0.63 |
| 19 職業を決定するのはまだ先のことであり、今はいろいろなことを経験してみる時期だと思う | 0.10 | 0.07 | 0.12 | 0.62 | 0.12 | 0.37 | 0.56 |
| 4 職業といわれても、まだ先の事のようにピンとこない | -0.60 | 0.20 | 0.16 | 0.57 | 0.17 | -0.01 | 0.49 |
| 18 自分の将来の職業について、真剣に考えたことがない | 0.31 | 0.05 | 0.25 | 0.52 | 0.24 | -0.19 | 0.52 |
| 13 将来の職業については、考える意欲がわからない | 0.36 | 0.24 | 0.12 | 0.43 | 0.40 | -0.16 | 0.57 |
| 16 自分にとって職業につくことは、それほど重要なことではない | 0.08 | -0.01 | 0.06 | 0.08 | 0.75 | 0.00 | 0.57 |
| 20 できることなら職業などもたず、いつまでも好きなことをしていたい | 0.13 | 0.24 | 0.08 | 0.24 | 0.49 | 0.05 | 0.38 |
| 21 いつも実現できないような職業ばかり考えている | 0.18 | 0.26 | 0.05 | 0.10 | 0.46 | 0.11 | 0.33 |
| 17 職業はまだ決めていないが、今の関心を深めていけば職業につながってくると思う | 0.11 | 0.00 | -0.01 | 0.00 | 0.04 | 0.57 | 0.33 |
| 15 これだと思う職業が見つかるまで、じっくり探していくつもりだ | 0.28 | 0.14 | -0.03 | 0.16 | -0.03 | 0.51 | 0.38 |
| 22 将来やってみたい職業がいくつかあり、それらについていろいろ考えている | -0.34 | 0.10 | 0.11 | -0.17 | 0.07 | 0.49 | 0.41 |
| 固 有 値 | 3.93 | 1.79 | 1.63 | 1.62 | 1.52 | 1.38 | 11.86 |
| 説 明 率 (%) | 17.07 | 7.74 | 7.09 | 7.03 | 6.60 | 5.99 | 51.55 |
| α 係 数 | 0.88 | 0.65 | 0.78 | 0.74 | 0.65 | 0.47 | |

表2 職業人イメージ尺度の因子分析の結果

| | I | II | III | 共通性 |
|-----------------|--------------|--------------|--------------|-------|
| | 重厚さ | 軽快さ | 落ち着き | |
| 11 意欲的な—無気力な | 0.76 | -0.12 | -0.07 | 0.59 |
| 3 充実した—むなしい | 0.69 | 0.08 | -0.20 | 0.52 |
| 9 深い—浅い | 0.67 | -0.19 | -0.20 | 0.52 |
| 7 力強い—弱々しい | 0.64 | 0.02 | -0.14 | 0.43 |
| 13 豊かな—貧弱な | 0.63 | 0.06 | 0.25 | 0.47 |
| 18 単調な—変化に富んだ | -0.45 | -0.40 | 0.21 | 0.40 |
| 14 非活動的な—活動的な | -0.53 | -0.20 | 0.04 | 0.33 |
| 17 小さい—大きい | -0.59 | 0.05 | -0.11 | 0.36 |
| 10 きらいな—好きな | -0.61 | -0.24 | 0.01 | 0.43 |
| 12 軽い—重い | -0.31 | 0.61 | -0.13 | 0.48 |
| 6 明るい—暗い | 0.40 | 0.54 | -0.11 | 0.46 |
| 16 リラックスした—緊張した | -0.02 | 0.50 | -0.07 | 0.26 |
| 4 かたい—やわらかい | 0.00 | -0.63 | 0.05 | 0.39 |
| 2 理性的な—感情的な | -0.06 | -0.13 | 0.59 | 0.37 |
| 1 不安定な—安定した | -0.05 | 0.05 | -0.60 | 0.36 |
| 5 平凡な—個性的な | -0.62 | -0.18 | 0.53 | 0.70 |
| 8 不自由な—自由な | -0.45 | -0.40 | 0.47 | 0.59 |
| 15 楽しい—苦しい | 0.48 | 0.59 | -0.04 | 0.58 |
| 固有値 | 4.58 | 2.17 | 1.47 | 8.23 |
| 説明率 (%) | 25.45 | 12.08 | 8.18 | 45.71 |
| α 係数 | 0.85 | 0.63 | 0.48 | |

(2) 職業人イメージ尺度

表2の各対の左の形容詞に当てはまるほうを1、右の形容詞に当てはまる場合を5として各評定値を1～5に得点化し、主因子法による因子分析をおこなった。固有値が1以上の因子は4個抽出されたが、因子の内容のまとまりのよさを考慮して3因子を抽出し、バリマックス回転をおこなった。その結果は表2に示した通りである。

第I因子は、「意欲的な—無気力な」、「充実した—むなしい」、「深い—浅い」などで正の負荷量が高かったことから、「重厚さ」因子と名付けた。第II因子については、「かたい—やわらかい」で負の、「軽い—重い」、「明るい—暗い」、「リラックスした—緊張した」などで正の因子負荷量が高かったので、「軽快さ」因子と解釈された。第III因子は、

「不安定な—安定した」で負の、「理性的な—感情的な」で正の負荷量が高いことから、「落ち着き」因子と名付けた。

(3) 父親の態度認知尺度

各項目について「まったくあてはまらない」を1、「よくあてはまる」を5として得点化した。項目14は初期の共通性が0.187と低かったため、これを除く13項目について主因子法による因子分析をおこない、固有値が1以上の3因子を抽出して、バリマックス回転をおこなった。表3にその結果を示した。

第I因子については、父親が「仕事にやりがいを感じている」と認知され、父親を尊敬し、生き方の1つのモデルとし、アドバイスをもらう、という項目で構成され、父親を望ましいモデルとしている内容であることから、「モデル」因子と解釈した。第II因子につい

表3 父親の態度認知尺度の因子分析(主因子法・バリマックス回転)の結果

| | 因 | 子 | I モデル | II 指示的態度 | III 仕事の話題 | 共通性 |
|----|---------------------------|---|-------------|--------------|--------------|-------|
| 12 | 父親は自分の仕事にやりがいを感じていると思う | | 0.72 | 0.04 | -0.06 | 0.52 |
| 8 | 仕事をしている父親を尊敬できる | | 0.71 | -0.11 | -0.02 | 0.52 |
| 13 | 父親は将来の仕事や人生についてアドバイスをくれる | | 0.68 | 0.24 | 0.15 | 0.55 |
| 11 | 父親は、生き方を考える時の1つのモデルになっている | | 0.68 | -0.01 | 0.05 | 0.46 |
| 1 | 私の将来のことについて父親とよく話し合う | | 0.63 | 0.23 | 0.15 | 0.47 |
| 6 | 父親がどのような仕事をしているのか知っている | | 0.57 | -0.05 | 0.19 | 0.37 |
| 2 | 父親が仕事をしている姿を見る機会がある | | 0.49 | -0.05 | 0.15 | 0.26 |
| 3 | 父親は私の生き方についていろいろ指図する | | 0.26 | 0.83 | 0.08 | 0.76 |
| 5 | 父親は、私の今の状態について不満を持っている | | -0.12 | 0.54 | 0.18 | 0.34 |
| 7 | 将来の職業や生き方について、父親の期待を強く感じる | | 0.38 | 0.53 | 0.16 | 0.45 |
| 10 | 父親は私の将来のことを私に任せてくれている | | 0.16 | -0.64 | -0.10 | 0.44 |
| 9 | 父親は仕事での不満を家で言う | | 0.02 | 0.23 | 0.72 | 0.57 |
| 4 | 父親は、自分の仕事の様子やできごとを家で話題にする | | 0.33 | 0.19 | 0.70 | 0.63 |
| | 固 | 有 | 3.28 | 1.88 | 1.18 | 6.33 |
| | 説 | 明 | 25.13 | 14.46 | 9.08 | 48.68 |
| | α | 係 | 0.83 | 0.74 | 0.72 | |

表4 母親の態度認知尺度の因子分析(主因子法・バリマックス回転)の結果

| | 因 | 子 | I モデル | II 指示的態度 | III 仕事の話題 | 共通性 |
|----|---------------------------|---|-------------|-------------|--------------|-------|
| 13 | 母親は将来の仕事や人生についてアドバイスをくれる | | 0.75 | 0.02 | 0.13 | 0.58 |
| 11 | 母親は、生き方を考える時の1つのモデルになっている | | 0.63 | 0.22 | -0.17 | 0.48 |
| 1 | 私の将来のことについて母親とよく話し合う | | 0.63 | 0.07 | 0.14 | 0.42 |
| 12 | 母親は自分の仕事にやりがいを感じていると思う | | 0.46 | 0.23 | -0.12 | 0.26 |
| 14 | 母親は、仕事上のことであなたの意見を求める | | 0.40 | 0.32 | 0.17 | 0.29 |
| 6 | 母親がどのような仕事をしているのか知っている | | 0.24 | 0.66 | -0.05 | 0.50 |
| 9 | 母親は仕事での不満を家で言う | | -0.16 | 0.63 | 0.35 | 0.53 |
| 4 | 母親は、自分の仕事の様子やできごとを家で話題にする | | 0.24 | 0.55 | 0.26 | 0.43 |
| 3 | 母親は私の行き方についていろいろ指図する | | 0.22 | 0.10 | 0.59 | 0.41 |
| 7 | 将来の職業や生き方について、母親の期待を強く感じる | | 0.25 | 0.13 | 0.53 | 0.36 |
| 5 | 母親は、私の今の状態について不満を持っている | | -0.14 | 0.04 | 0.46 | 0.23 |
| 10 | 母親は私の将来のことを私に任せてくれている | | 0.29 | 0.11 | -0.53 | 0.38 |
| 2 | 母親が仕事をしている姿を見る機会がある | | 0.30 | 0.35 | -0.15 | 0.23 |
| 8 | 仕事をしている母親を尊敬できる | | 0.58 | 0.46 | -0.17 | 0.59 |
| | 固 | 有 | 2.49 | 1.72 | 1.48 | 5.68 |
| | 説 | 明 | 17.76 | 12.26 | 10.54 | 40.56 |
| | α | 係 | 0.72 | 0.68 | 0.64 | |

表5 進路影響因尺度の因子分析（主因子法・バリマックス回転）の結果

| 因子 | I 情報 | II 個性 | III 現実的要因 | IV 身近モデル | 共通性 |
|----------------------------|-------------|-------------|--------------|-------------|-------|
| 10 大学の教員のアドバイス | 0.59 | 0.00 | 0.12 | 0.17 | 0.39 |
| 12 先輩からの情報 | 0.59 | 0.01 | 0.04 | 0.38 | 0.49 |
| 14 大学での授業や講演会など | 0.58 | 0.10 | 0.06 | 0.06 | 0.35 |
| 7 本・パンフレット、インターネットなどから得た情報 | 0.51 | 0.22 | 0.15 | -0.95 | 0.34 |
| 5 自分の能力や性格をいかせること | 0.11 | 0.83 | -0.10 | 0.09 | 0.71 |
| 2 自分の興味に合うこと | 0.06 | 0.66 | -0.08 | -0.12 | 0.46 |
| 11 自分の将来のライフスタイルに合うこと | 0.10 | 0.62 | 0.10 | 0.13 | 0.42 |
| 4 親の期待や希望 | 0.11 | -0.07 | 0.71 | 0.11 | 0.54 |
| 13 親からのアドバイス | 0.12 | 0.03 | 0.70 | 0.41 | 0.67 |
| 16 自分の学業成績のレベル | 0.34 | 0.02 | 0.46 | 0.00 | 0.33 |
| 9 身近な人（親以外）の仕事 | 0.20 | 0.05 | 0.15 | 0.61 | 0.43 |
| 15 親の仕事 | -0.05 | -0.05 | 0.42 | 0.49 | 0.42 |
| 8 友達の意見やアドバイス | 0.44 | 0.13 | 0.12 | 0.42 | 0.40 |
| 固有値 | 1.68 | 1.58 | 1.48 | 1.19 | 5.93 |
| 説明率（%） | 12.94 | 12.17 | 11.39 | 9.13 | 45.63 |
| α 係数 | 0.67 | 0.75 | 0.69 | 0.54 | |

ては、負荷量の高い項目が生き方の指図をし、将来のことを子どもに任せてくれず、子どもの現状に不満をもち、子どもの将来の生き方に強い期待をもっているという内容であるため、「指示的態度」因子と名付けた。第Ⅲ因子は、「仕事での不満を家でいう」と「自分の仕事について家で話題にする」で負荷量が高いので、「仕事の話題」因子と名付けた。

（４）母親の態度認知尺度

父親の態度認知尺度と同様に評定値を得点化し、14項目について主因子法による因子分析をおこなった。固有値が1以上であることと因子の内容のまとまりのよさから3因子を抽出し、バリマックス回転をおこなった。その結果は表4の通りである。

第Ⅰ因子については、母親がアドバイスをくれ、生き方の1つのモデルとなり、将来についての相談相手となっているという内容の項目で負荷量が高いことから、父親の場合と同様に望ましい「モデル」因子と解釈された。第Ⅱ因子は、「母親の仕事の内容を知ってい

る」、「仕事の不満を家でいう」、「仕事のことを家で話題にする」で因子負荷量が高いので、「仕事の話題」因子と名付けた。第Ⅲ因子は、子どもの生き方に指図をし、期待をし、子どもに任せてくれないといった内容で構成され、「指示的態度」因子と解釈された。

（５）職業決定影響因尺度

各項目について「まったく影響しなかった」を1、「ひじょうに影響した」を5として各評定値を得点化した。16項目のうち、項目1「家の経済状態」、項目3「高校までの先生のアドバイス」、項目6「友だちの進路がそうであること」は初期の共通性が0.12～0.23と低かったため、これらを除いた13項目で主因子法による因子分析をおこなった。固有値が1以上の4因子を抽出し、バリマックス回転をおこなった。表5に結果を示した。

第Ⅰ因子に負荷量が高い項目は、「大学教員のアドバイス」、「先輩からの情報」、「大学での授業や講演会」、「本、パンフレット、インターネットなどからの情報」であり、「情

報」因子と名付けた。第II因子については、「自分の能力や適性をいかせる」、「自分の興味にあう」、「自分の生き方やライフスタイルにあう」で因子負荷量が高く、「個性」因子と解釈した。第III因子は、親の期待やアドバ

イス、自分の学業レベルで構成されているので、「現実的要因」因子と名付けた。第IV因子については、「(親以外の) 身近な人の仕事」と「親の仕事」で因子負荷量が高いため、「身近モデル」因子と名付けた。

表6 職業未決定についての性別×父親の態度認知の分散分析結果

| | | | 職 業 未 決 定 因 子 | | | | | | | | | | | | | |
|--|---|-----------|---------------|-------|------|------|-------|------|-------|-------|---------|--------|------|------|------|------|
| | | | 未 決 定 | | 混 乱 | | 安 直 | | 意欲の低さ | | 決 定 回 避 | | 模 索 | | | |
| | | | 女子 | 男子 | 女子 | 男子 | 女子 | 男子 | 女子 | 男子 | 女子 | 男子 | 女子 | 男子 | | |
| 父 親 の 指 示 的 態 度 認 知 | モ デ ル | 高 群 | 平 均 値 | 3.09 | 2.91 | 2.95 | 2.85 | 1.91 | 2.05 | 2.17 | 2.32 | 1.97 | 2.03 | 3.12 | 0.20 | |
| | | S D | 0.91 | 0.86 | 0.87 | 0.90 | 0.81 | 0.75 | 0.70 | 0.79 | 0.80 | 0.94 | 0.76 | 0.91 | | |
| | | n | 72 | 30 | 72 | 30 | 72 | 30 | 72 | 30 | 72 | 30 | 72 | 30 | | |
| | 親 の 指 示 的 態 度 認 知 | デ ル | 低 群 | 平 均 値 | 3.40 | 3.49 | 2.94 | 2.94 | 2.00 | 2.25 | 2.29 | 2.64 | 2.09 | 2.47 | 3.10 | 3.13 |
| | | | S D | 0.81 | 0.80 | 0.74 | 0.96 | 0.82 | 1.17 | 0.65 | 0.96 | 0.74 | 1.07 | 0.76 | 0.75 | |
| | | | n | 85 | 26 | 85 | 26 | 85 | 26 | 85 | 26 | 85 | 26 | 85 | 26 | |
| | | 性別主効果 (F) | 0.08 | | 0.15 | | 2.14 | | 4.84* | | 3.00+ | | 0.19 | | | |
| | | 態度主効果 (F) | 11.32*** | | 0.12 | | 1.18 | | 3.81+ | | 4.70* | | 0.14 | | | |
| | 交互作用 (F) | 1.01 | | 0.14 | | 0.17 | | 0.84 | | 1.50 | | 0.05 | | | | |
| | 因 子 の 話 題 | 高 群 | 平 均 値 | 3.39 | 3.18 | 2.94 | 3.00 | 2.10 | 2.13 | 2.26 | 2.48 | 2.03 | 2.47 | 2.93 | 3.30 | |
| S D | | | 0.92 | 0.93 | 0.78 | 0.84 | 0.87 | 0.97 | 0.70 | 0.91 | 0.77 | 1.10 | 0.75 | 0.62 | | |
| n | | | 63 | 32 | 63 | 32 | 63 | 32 | 63 | 32 | 63 | 32 | 63 | 32 | | |
| 低 群 | | 平 均 値 | 3.16 | 3.19 | 2.95 | 2.75 | 1.86 | 2.17 | 2.22 | 2.46 | 2.04 | 1.93 | 3.23 | 2.99 | | |
| | | S D | 0.83 | 0.82 | 0.81 | 1.01 | 0.76 | 0.97 | 0.66 | 0.86 | 0.76 | 0.82 | 0.74 | 1.03 | | |
| | | n | 94 | 24 | 94 | 24 | 94 | 24 | 94 | 24 | 94 | 24 | 94 | 24 | | |
| | | 性別主効果 (F) | 0.46 | | 0.26 | | 1.48 | | 3.89* | | 1.61 | | 0.28 | | | |
| | | 態度主効果 (F) | 0.66 | | 0.85 | | 0.55 | | 0.06 | | 4.16* | | 0.00 | | | |
| 交互作用 (F) | | 0.80 | | 0.98 | | 1.11 | | 0.01 | | 4.28* | | 6.69** | | | | |
| 子 事 話 題 | | 高 群 | 平 均 値 | 3.22 | 3.04 | 3.00 | 2.94 | 2.01 | 2.10 | 2.31 | 2.42 | 2.07 | 2.37 | 3.17 | 3.27 | |
| | S D | | 0.79 | 0.89 | 0.80 | 0.98 | 0.82 | 0.82 | 0.65 | 0.87 | 0.70 | 1.03 | 0.79 | 0.93 | | |
| | n | | 75 | 26 | 75 | 26 | 75 | 26 | 75 | 26 | 75 | 26 | 75 | 26 | | |
| | 低 群 | 平 均 値 | 3.28 | 3.31 | 2.90 | 2.85 | 1.91 | 2.18 | 2.16 | 2.51 | 2.00 | 2.12 | 3.05 | 3.08 | | |
| | | S D | 0.94 | 0.86 | 0.80 | 0.87 | 0.81 | 1.08 | 0.70 | 0.90 | 0.82 | 1.02 | 0.72 | 0.74 | | |
| | | n | 82 | 30 | 82 | 30 | 82 | 30 | 82 | 30 | 82 | 30 | 82 | 30 | | |
| 性別主効果 (F) | 0.34 | | 0.16 | | 1.80 | | 3.97* | | 2.61 | | 0.25 | | | | | |
| 態度主効果 (F) | 1.50 | | 0.53 | | 0.00 | | 0.07 | | 1.50 | | 1.65 | | | | | |
| 交互作用 (F) | 0.60 | | 0.00 | | 0.45 | | 1.01 | | 0.47 | | 0.09 | | | | | |

*** $p < .001$; ** $p < .01$; * $p < .05$; + $p < .10$

2. 職業未決定状態と性別および両親の態度認知の要因の関連性の検討

職業未決定の6つの様態（6因子）がそれぞれ被調査者自身が認知した親の態度や親子関係とどのような関連性をもっているのか、またその関連性は性別によって異なるのかを検討するために、父親および母親の態度認知尺度の各因子の得点の高さと性別を独立変数とし、職業未決定の6因子の各得点を従属変数とする2要因の分散分析をおこなった。ここで各因子の得点は、当該因子を構成する項目の評定値の合計を項目数で割ったものであり、また得点が高いほどそれぞれの因子名で表される傾向が強いことを示すように、必要な項目については得点化の方向を逆転した。また親の態度認知に関しては、できるだけ偏りが少なく分割されるように各因子得点で高低の2群に分割した。

（1）父親の態度認知について

表6は、職業未決定尺度の各因子の得点を従属変数とし、父親の態度認知の3因子別に性別×父親の態度認知の高低の2要因の分散分析をおこなった結果である。

まず性別×「モデル」高低についての結果をみていく。「未決定」については「モデル」の主効果だけが有意であり、「モデル」高群より低群で未決定得点が高い。「混乱」については性別と「モデル」の主効果も交互作用も有意でなかった。「安直」についても有意な効果はみられなかった。「意欲の低さ」については、まず「性別」の主効果が有意（ $p < .01$ ）であり、女性よりも男性で得点が高かった。また「モデル」の主効果も有意な傾向にあり、高群より低群で「意欲の低さ」得点が高かった「決定回避」については「モデル」の主効果が有意（ $p < .05$ ）であり、高群よりも低群で「決定回避」得点が高い。性別は有意な傾向があり、女子より男子で得点が高かった。交互作用は有意でなかった。「模索」についてはどの効果も有意ではなかった。

次に性別×「指示的態度」の分散分析の結果についてみていく。「未決定」、「混乱」、「安直」の3つについてはどの効果も有意ではなかった。「意欲の低さ」については、性別の主効果が有意（ $p < .05$ ）であり、女子より男子で意欲が低くなっている。態度の主効果と交互作用は有意ではなかった。「決定回避」に関しては、「指示的態度」の主効果と交互作用が有意（ $p < .05$ ）となった。交互作用のパターンをみると、女子では「指示的態度」の高低による「決定回避」得点の差がなく、また「指示的態度」の低い男子も女子と同程度の得点を示しているが、指示的態度高群の男子では「決定回避」得点が高いという結果であった。最後に「模索」では、性別×「模索」高低の交互作用だけが有意（ $p < .01$ ）であった。女子では「指示的態度」高群より低群で「模索」が高いが、男子では低群より高群で模索が高くなっている。

性別×「仕事の話題」の分散分析については、「意欲の低さ」で性別の主効果が有意（ $p < .05$ ）であり、既に述べたように女子より男子で意欲が低いという結果以外には、有意な効果はみられなかった。

（2）母親の態度認知について

表7は職業未決定尺度の各因子の得点を従属変数とし、母親の態度認知の3因子別に性別×母親の態度認知の2×2の分散分析をおこなった結果である。

まず性別×「モデル」の分散分析の結果からみていく。「未決定」では「モデル」高低の主効果が有意であり、高群より低群で「未決定」得点が高い。態度の主効果と交互作用は有意ではなかった。次に「混乱」をみると、性別×態度の交互作用が有意（ $p < .05$ ）であった。交互作用のパターンをみると、女子では「モデル」の高群と低群の差はないのに対し、男子では高群は「混乱」得点が高く、低群は低いというものであった。「モデル」の主効果は有意な傾向（ $p < .10$ ）にあったが、性別

の主効果は有意ではなかった。「安直」では「モデル」の主効果が有意傾向($p<.10$)にあり、「モデル」高群より低群で「安直」得点が高かった。性別の主効果と交互作用は有意ではなかった。「意欲の低さ」では性別の主効果が有意傾向($p<.10$)にあり、これまでと同様

に女子より男子で意欲が低い。「モデル」の主効果と交互作用は有意ではない。次に「決定回避」においては性別×「モデル」の交互作用が有意($p<.01$)であった。そのパターンをみると、女子では「モデル」高群より低群で「決定回避」得点が高いのに対し、男子で

表7 職業未決定についての性別×母親の態度認知の分散分析結果

| | | | 職 業 未 決 定 因 子 | | | | | | | | | | | | |
|-------------------|---------------|-------|-------------------|------|-------------------|------|-------------------|------|-------------------|-------------------|--------------------|------|-------------------|------|------|
| | | | 未 決 定 | | 混 乱 | | 安 直 | | 意 欲 の 低 さ | | 決 定 回 避 | | 模 索 | | |
| | | | 女 子 | 男 子 | 女 子 | 男 子 | 女 子 | 男 子 | 女 子 | 男 子 | 女 子 | 男 子 | 女 子 | 男 子 | |
| 母 親 の 指 示 的 認 知 度 | モ デ ル | 高 群 | 平 均 値 | 3.05 | 3.12 | 2.91 | 3.20 | 1.88 | 1.96 | 2.14 | 2.44 | 1.89 | 2.50 | 3.14 | 3.36 |
| | | S D | 0.86 | 0.76 | 0.77 | 0.81 | 0.79 | 0.75 | 0.69 | 0.81 | 0.70 | 1.10 | 0.83 | 0.90 | |
| | | n | 89 | 24 | 89 | 24 | 89 | 24 | 89 | 24 | 89 | 24 | 89 | 24 | |
| | 低 群 | 平 均 値 | 3.53 | 3.23 | 2.99 | 2.66 | 2.07 | 2.28 | 2.36 | 2.49 | 2.22 | 2.04 | 3.07 | 3.02 | |
| | S D | 0.81 | 0.96 | 0.83 | 0.94 | 0.83 | 1.08 | 0.63 | 0.94 | 0.81 | 0.92 | 0.66 | 0.76 | | |
| | n | 68 | 32 | 68 | 32 | 68 | 32 | 68 | 32 | 68 | 32 | 68 | 32 | | |
| | 性 別 主 効 果 (F) | | 0.70 | | 0.03 | | 1.24 | | 3.52 ⁺ | | 2.77 ⁺ | | 0.49 | | |
| | 態 度 主 効 果 (F) | | 4.95 [*] | | 3.05 ⁺ | | 3.68 ⁺ | | 1.45 | | 0.25 | | 2.76 ⁺ | | |
| | 交 互 作 用 (F) | | 1.90 | | 5.69 [*] | | 0.25 | | 0.53 | | 9.29 ^{**} | | 1.27 | | |
| | 因 子 的 認 知 度 | 高 群 | 平 均 値 | 3.36 | 3.04 | 3.06 | 2.93 | 2.03 | 2.03 | 2.24 | 2.24 | 1.96 | 2.17 | 3.11 | 3.23 |
| S D | | | 0.91 | 0.94 | 0.78 | 1.10 | 0.88 | 1.09 | 0.69 | 0.82 | 0.81 | 1.11 | 0.80 | 0.91 | |
| n | | | 70 | 20 | 70 | 20 | 70 | 20 | 70 | 20 | 70 | 20 | 70 | 20 | |
| 低 群 | | 平 均 値 | 3.17 | 3.26 | 2.85 | 2.88 | 1.90 | 2.21 | 2.23 | 2.60 | 2.09 | 2.28 | 3.11 | 3.13 | |
| S D | | 0.83 | 0.84 | 0.80 | 0.81 | 0.75 | 0.89 | 0.67 | 0.90 | 0.73 | 0.98 | 0.72 | 0.80 | | |
| n | | 87 | 36 | 87 | 36 | 87 | 36 | 87 | 36 | 87 | 36 | 87 | 36 | | |
| 性 別 主 効 果 (F) | | | 0.65 | | 0.18 | | 1.21 | | 2.40 | | 2.09 | | 0.32 | | |
| 態 度 主 効 果 (F) | | | 0.12 | | 0.93 | | 0.04 | | 2.21 | | 0.80 | | 0.17 | | |
| 交 互 作 用 (F) | | | 2.13 | | 0.35 | | 1.27 | | 2.45 | | 0.01 | | 0.18 | | |
| 子 事 話 題 | | 高 群 | 平 均 値 | 3.30 | 3.08 | 3.01 | 2.87 | 2.04 | 2.06 | 2.24 | 2.38 | 2.15 | 2.38 | 3.05 | 3.15 |
| | S D | | 0.88 | 0.88 | 0.74 | 0.95 | 0.85 | 0.98 | 0.69 | 0.82 | 0.82 | 1.04 | 0.71 | 0.81 | |
| | n | | 72 | 34 | 72 | 34 | 72 | 34 | 72 | 34 | 72 | 34 | 72 | 34 | |
| | 低 群 | 平 均 値 | 3.22 | 3.35 | 2.89 | 2.93 | 1.89 | 2.27 | 2.23 | 2.60 | 1.94 | 2.02 | 3.16 | 3.20 | |
| | S D | 0.86 | 0.87 | 0.85 | 0.88 | 0.77 | 0.95 | 0.66 | 0.97 | 0.70 | 0.97 | 0.80 | 0.88 | | |
| | n | 85 | 22 | 85 | 22 | 85 | 22 | 85 | 22 | 85 | 22 | 85 | 22 | | |
| | 性 別 主 効 果 (F) | | 0.11 | | 0.15 | | 2.20 | | 4.89 [*] | | 1.40 | | 0.29 | | |
| 態 度 主 効 果 (F) | | 0.50 | | 0.03 | | 0.05 | | 0.86 | | 4.80 [*] | | 0.46 | | | |
| 交 互 作 用 (F) | | 1.65 | | 0.45 | | 1.84 | | 0.92 | | 0.35 | | 0.08 | | | |

** $p<.01$; * $p<.05$; + $p<.10$

は逆に低群より高群で決定回避が強くなっている。最後に「模索」では、「モデル」の主効果が有意傾向($p<.10$)を示しただけで、他の効果は有意ではなかった。

次に性別×「仕事の話題」の分散分析の結果をみていくと、職業未決定の6因子すべてにおいて、どの主効果も交互作用も有意ではなかった。

最後に性別×「指示的態度」の分散分析の結果をみていく。「未決定」、「混乱」、「安直」、および「模索」に関しては主効果も交互作用もすべて有意ではなかった。「意欲の低さ」についてはこれまでと同様に性別の主効果が有意($p<.05$)であり、女子より男子で意欲が低くなっている。「決定回避」については「指示的態度」の主効果だけが有意($p<.05$)であり、「指示的態度」得点の低群より高群で「決定回避」得点が高くなっている。

3. 職業未決定状態と性別および職業人イメージとの関連性の検討

職業人についてもっているイメージの望ましさが職業決定に対する構えに影響を及ぼしているのかどうか、またその影響は性別によって異なるのかという点を検討するために、職業人イメージの3因子それぞれの得点の高低と性別を独立変数、職業未決定尺度の6因子のそれぞれの得点を従属変数とする2×2の分散分析をおこなった。ここで職業人イメージの各因子の得点は、当該因子を構成する項目の評定値の合計を項目数で割ったものであり、得点が高いほどその因子名で表される傾向が強いことを示すように、必要な項目の評定値を逆転させた。職業人イメージの各因子の得点によって被調査者が男女それぞれでほぼ2分されるように、男女共通の基準で高群と低群にわけた。各群の平均値と分散分析の結果を表8に示した。

まず性別×「重厚さ」高低の分散分析の結果からみてみる。「未決定」、「混乱」、「安直」

についてはいずれの効果も有意ではなかった。「意欲の低さ」については性別の主効果が有意($p<.05$)であり、女子より男子で得点が高い。イメージの主効果と交互作用は有意ではなかった。「決定回避」では「重厚さ」高低の主効果が有意($p<.05$)であり、高群より低群で得点が高かった。最後に「模索」では交互作用だけが有意な傾向($p<.10$)にあった。女子では「重厚さ」高群と低群の差がないのに対し、男子では高群より低群で「模索」が高くなっている。

次に性別×「軽快さ」の分散分析の結果をみていく。「未決定」では交互作用だけが有意($p<.01$)となった。女子では「軽快さ」高群より低群で「未決定」が高いのに対し、男子では逆に「軽快さ」低群より高群で「未決定」が高い。「混乱」でも交互作用だけが有意傾向($p<.10$)にあり、交互作用のパターンは「未決定」の場合と同様である。「安直」ではどの主効果も交互作用も有意ではなかった。次に「意欲の低さ」については性別の主効果($p<.05$)と交互作用($p<.01$)が有意であった。性別に関してはこれまでと同様に女子より男子で意欲が低い。交互作用については、「軽快さ」低群では男女差がみられないのに対し、「軽快さ」が高い場合には性差が大きく、女子では「意欲の低さ」得点がわずかに低くなるが、男子では「軽快さ」高群の意欲の低さは他の3群より強い。「決定回避」については性別の主効果が有意な傾向($p<.10$)にあり、女子より男子で回避傾向が強くなっている。交互作用も有意傾向($p<.10$)を示した。「軽快さ」低群では性差がみられないが、高群では性差が大きく、女子高群では「決定回避」が低いのに対し、男子高群では高くなっている。最後に「模索」では主効果も交互作用もいずれも有意とはならなかった。

最後に性別×「着落き」の分散分析結果をみていく。「未決定」、「混乱」および「模索」では主効果も交互作用もすべて有意ではなかった。

た。「安直」では「落ち着き」高低の主効果が有意傾向($p<.10$)にあった。「意欲の低さ」についてみられた性別の主効果は、これまでと同様である。「落ち着き」の主効果と交互作用は有意でなかった。「決定回避」については

交互作用が有意な傾向($p<.10$)を示した。「落ち着き」低群の男子だけで「決定回避」傾向が強い。

表8 職業未決定について性別×職業人イメージの分散分析結果

| | | | 職 業 未 決 定 因 子 | | | | | | | | | | | | |
|---|-------------|--------|-------------------|------|-------------------|------|--------|-------|-------------------|-------|---------|-------------------|------|------|------|
| | | | 未 決 定 | | 混 乱 | | 安 直 | | 意欲の低さ | | 決 定 回 避 | | 模 索 | | |
| | | | 女子 | 男子 | 女子 | 男子 | 女子 | 男子 | 女子 | 男子 | 女子 | 男子 | 女子 | 男子 | |
| 職 業 人 イ メ ー ジ 因 子 | 重 厚 さ | 高 群 | 平 均 値 | 3.17 | 3.14 | 2.95 | 2.83 | 1.98 | 2.06 | 2.13 | 2.45 | 1.94 | 2.00 | 3.15 | 2.97 |
| | | S D | 0.88 | 1.06 | 0.83 | 0.99 | 0.93 | 0.85 | 0.65 | 1.07 | 0.76 | 1.01 | 0.80 | 0.93 | |
| | | n | 84 | 25 | 84 | 25 | 84 | 25 | 84 | 25 | 84 | 25 | 84 | 25 | |
| | | 低 群 | 平 均 値 | 3.35 | 3.22 | 2.95 | 2.94 | 1.93 | 2.21 | 2.35 | 2.48 | 2.15 | 2.43 | 3.06 | 3.32 |
| | | S D | 0.86 | 0.70 | 0.77 | 0.87 | 0.65 | 1.05 | 0.69 | 0.72 | 0.76 | 1.00 | 0.71 | 0.72 | |
| | n | 73 | 31 | 73 | 31 | 73 | 31 | 73 | 31 | 73 | 31 | 73 | 31 | | |
| | 性別主効果 (F) | 0.36 | | 0.21 | | 1.76 | | 3.87* | | 1.79 | | 0.11 | | | |
| | イメージ効果 (F) | 0.88 | | 0.19 | | 0.14 | | 1.19 | | 6.07* | | 1.17 | | | |
| | 交互作用 (F) | 0.16 | | 0.19 | | 0.56 | | 0.63 | | 0.72 | | 3.24 ⁺ | | | |
| | 軽 快 さ | 高 群 | 平 均 値 | 3.09 | 3.48 | 2.84 | 3.05 | 1.86 | 2.10 | 2.11 | 2.72 | 1.86 | 2.35 | 3.15 | 3.28 |
| S D | 0.78 | 0.65 | 0.81 | 0.85 | 0.77 | 0.80 | 0.56 | 0.81 | 0.63 | 0.96 | 0.75 | 0.72 | | | |
| n | 63 | 25 | 63 | 25 | 63 | 25 | 63 | 25 | 63 | 25 | 63 | 25 | | | |
| 低 群 | 平 均 値 | 3.36 | 2.94 | 3.02 | 2.77 | 2.03 | 2.18 | 2.32 | 2.27 | 2.15 | 2.15 | 3.09 | 3.08 | | |
| S D | 0.91 | 0.96 | 0.79 | 0.97 | 0.83 | 1.08 | 0.74 | 0.89 | 0.83 | 0.07 | 0.77 | 0.91 | | | |
| n | 94 | 31 | 94 | 31 | 94 | 31 | 94 | 31 | 94 | 31 | 94 | 31 | | | |
| 性別主効果 (F) | 0.01 | | 0.03 | | 2.15 | | 6.03* | | 3.46 ⁺ | | 0.25 | | | | |
| イメージ効果 (F) | 0.95 | | 0.18 | | 0.85 | | 1.19 | | 0.12 | | 1.20 | | | | |
| 交互作用 (F) | 9.07** | | 3.11 ⁺ | | 0.12 | | 8.41** | | 3.41 ⁺ | | 0.34 | | | | |
| 着 き | 高 群 | 平 均 値 | 3.26 | 3.31 | 2.90 | 2.96 | 2.01 | 2.31 | 2.24 | 2.59 | 2.09 | 2.07 | 3.20 | 3.09 | |
| S D | 0.87 | 0.95 | 0.84 | 0.85 | 0.88 | 0.96 | 0.68 | 0.96 | 0.76 | 0.94 | 0.76 | 0.67 | | | |
| n | 84 | 29 | 84 | 29 | 84 | 29 | 84 | 29 | 84 | 29 | 84 | 29 | | | |
| 低 群 | 平 均 値 | 3.25 | 3.05 | 3.00 | 2.82 | 1.90 | 1.96 | 2.22 | 2.33 | 1.97 | 2.42 | 3.01 | 3.25 | | |
| S D | 0.87 | 0.78 | 0.75 | 1.00 | 0.72 | 0.95 | 0.67 | 0.78 | 0.76 | 1.09 | 0.75 | 0.98 | | | |
| n | 73 | 27 | 73 | 27 | 73 | 27 | 73 | 27 | 73 | 27 | 73 | 27 | | | |
| 性別主効果 (F) | 0.31 | | 0.21 | | 1.87 | | 4.06* | | 2.72 | | 0.30 | | | | |
| イメージ効果 (F) | 1.05 | | 0.02 | | 2.86 ⁺ | | 1.53 | | 0.76 | | 0.02 | | | | |
| 交互作用 (F) | 0.83 | | 0.81 | | 0.86 | | 1.10 | | 3.31 ⁺ | | 2.03 | | | | |

** $p<.01$; * $p<.05$; + $p<.10$

4. 女子および男子の職業未決定状態と職業人イメージおよび両親の態度認知との関連性の検討

職業人イメージの3因子、父親の態度認知の3因子、および母親の態度認知の3因子が職業未決定状態とどのように関連しているのかを検討するために、これら9因子の得点を説明変数、未決定の6因子の得点をそれぞれ目的変数とする重回帰分析を男女別におこなった。その結果は表9の通りである。

女子については、「未決定」、「意欲の低さ」、「決定回避」において9因子得点による重回帰式が予測に有効であった。「未決定」得点を目的変数とした場合をみると、「母親・モデル」が有意な負の寄与を示し、「父親・指示的態度」が有意な正の寄与を示している。次に「意欲の低さ」についてみると、「父親・仕事の話題」が有意な正の寄与を、「母親・モデル」が有意な負の寄与をしていた。「決定回避」の場合には、「母親・モデル」と「母親・仕事の話題」がいずれも有意な負の寄与を示した。

男子については、9個の因子得点による重回帰式が予測に有効であったのは「決定回避」を目的変数にした場合だけであった。「決定

回避」に対して「父親・モデル」が有意な負の寄与を、「父親・指示的態度」が正の有意な寄与を示し、また「母親・モデル」がほぼ有意な正の寄与を示していた。「父親・モデル」は「混乱」と「意欲の低さ」に対しても負の有意な寄与をしていた。また「母親・モデル」は「混乱」と「模索」に対しても有意な正の寄与を示した。

職業人イメージの3因子については、「軽快さ」が男子の「混乱」と「模索」に有意な正の寄与を示し、女子の「決定回避」に有意な負の寄与を示したが、「重厚さ」と「落ち着き」は有意な寄与をまったく示さなかった。

5. 職業決定の影響因と父親および母親の態度認知との関連性の検討

どのような要因に基づいて職業決定をすることが、親の態度の認知とどのような関連性をもつかを検討するために、職業決定影響因の3因子得点をそれぞれ従属変数、性別と親の態度認知の高低群を独立変数とする2×2の分散分析をおこなった。表10と表11にその結果を示した。なお影響因の因子得点は、各因子に属する項目の評定値の合計をその項目数で割ったものであり、得点が高いほど、影響因

表9 職業未決定についての職業人イメージと親の態度認知の関連性（重回帰分析）

| | 女 子 | | | | | | 男 子 | | | | | |
|---------------|--------------|-------|-------------|--------------|--------------|-------|-------|--------------|-------|--------------|--------------|-------------|
| | 未決定 | 混乱 | 安直 | 意欲の低さ | 決定回避 | 模索 | 未決定 | 混 乱 | 安 直 | 意欲の低さ | 決定回避 | 模 索 |
| 重 相 関 係 数 | 0.45 | 0.28 | 0.29 | 0.37 | 0.41 | 0.22 | 0.45 | 0.53 | 0.42 | 0.45 | 0.56 | 0.48 |
| 重 厚 さ | -0.06 | 0.08 | -0.02 | -0.12 | -0.11 | 0.04 | -0.03 | 0.13 | -0.21 | 0.01 | 0.01 | -0.10 |
| 独 軽 快 さ | -0.14 | -0.16 | -0.04 | -0.12 | -0.17 | 0.01 | 0.04 | 0.32 | -0.24 | -0.03 | 0.06 | 0.30 |
| 落 着 き | -0.08 | -0.07 | 0.07 | -0.09 | 0.01 | 0.06 | -0.06 | 0.16 | 0.07 | -0.01 | -0.04 | 0.07 |
| 立 父 モ デ ル | -0.06 | -0.06 | 0.01 | -0.09 | 0.00 | -0.14 | -0.33 | -0.51 | -0.14 | -0.39 | -0.60 | -0.10 |
| 父 指 示 的 態 度 | 0.17 | -0.01 | 0.19 | 0.16 | 0.07 | -0.07 | 0.29 | 0.36 | -0.05 | 0.31 | 0.38 | 0.25 |
| 変 父 仕 事 の 話 題 | 0.02 | 0.16 | 0.05 | 0.22 | 0.12 | 0.15 | -0.25 | 0.05 | 0.02 | -0.14 | -0.02 | -0.15 |
| 母 モ デ ル | -0.40 | -0.18 | -0.17 | -0.20 | -0.26 | 0.14 | 0.18 | 0.37 | -0.12 | 0.15 | 0.30 | 0.42 |
| 数 母 仕 事 の 話 題 | 0.15 | -0.03 | 0.03 | -0.03 | -0.18 | -0.10 | -0.06 | 0.21 | -0.16 | -0.16 | -0.02 | 0.18 |
| 母 指 示 的 態 度 | -0.04 | 0.07 | 0.04 | -0.13 | 0.00 | 0.01 | -0.20 | -0.03 | -0.05 | -0.14 | 0.13 | -0.13 |

数値は標準偏回帰係数、太字は $p<.05$ 以下で有意であることを示す

表10 職業決定影響因について父親の態度認知の分散分析結果

| | | | 職 業 決 定 因 子 | | | | | | | | |
|---|----------------------------|--------|-------------|------|-------|-------------------|-------|----------|----------|------|------|
| | | | 情 報 | | 個 性 | | 現実的要因 | | 身近モデル | | |
| | | | 女子 | 男子 | 女子 | 男子 | 女子 | 男子 | 女子 | 男子 | |
| 父 親 の 指 示 的 認 知 度 因 子 | モ デ ル | 高 群 | 平 均 値 | 2.49 | 2.13 | 3.82 | 4.20 | 2.96 | 2.78 | 2.46 | 2.78 |
| | | S D | 0.85 | 0.84 | 0.88 | 0.76 | 0.94 | 1.04 | 1.11 | 1.16 | |
| | | n | 72 | 30 | 26 | 30 | 72 | 30 | 72 | 30 | |
| | 低 群 | 平 均 値 | 2.35 | 2.04 | 3.83 | 3.64 | 2.60 | 2.56 | 2.02 | 2.04 | |
| | S D | 0.71 | 0.81 | 0.77 | 0.89 | 0.77 | 1.19 | 0.85 | 0.87 | | |
| | n | 85 | 26 | 85 | 26 | 85 | 26 | 85 | 26 | | |
| | 性別主効果 (F) | | 7.33** | | 0.55 | | 0.60 | | 1.20 | | |
| | 態度主効果 (F) | | 0.95 | | 4.52* | | 3.91* | | 14.48*** | | |
| | 交互作用 (F) | | 0.04 | | 4.92* | | 0.25 | | 1.00 | | |
| | 指 示 的 認 知 度 | 高 群 | 平 均 値 | 2.34 | 2.25 | 3.70 | 4.00 | 3.02 | 3.06 | 2.49 | 2.77 |
| | | S D | 0.74 | 0.74 | 0.83 | 0.83 | 0.88 | 1.08 | 1.05 | 1.13 | |
| | | n | 63 | 32 | 63 | 32 | 63 | 32 | 63 | 32 | |
| 低 群 | 平 均 値 | 2.46 | 1.88 | 3.91 | 3.86 | 2.60 | 2.17 | 2.04 | 2.00 | | |
| S D | 0.80 | 0.89 | 0.81 | 0.92 | 0.83 | 0.95 | 0.93 | 0.90 | | | |
| n | 94 | 24 | 94 | 56 | 94 | 24 | 94 | 24 | | | |
| 性別主効果 (F) | | 7.50** | | 0.92 | | 1.92 | | 0.55 | | | |
| 態度主効果 (F) | | 1.05 | | 0.08 | | 21.73*** | | 15.10*** | | | |
| 交互作用 (F) | | 4.01* | | 1.80 | | 2.81 ⁺ | | 1.02 | | | |
| 因 子 の 話 題 | 高 群 | 平 均 値 | 2.41 | 2.26 | 3.87 | 4.05 | 2.94 | 2.88 | 2.30 | 2.87 | |
| | S D | 0.77 | 0.80 | 0.78 | 0.81 | 0.85 | 1.12 | 1.01 | 1.13 | | |
| | n | 75 | 26 | 75 | 26 | 75 | 26 | 75 | 26 | | |
| 低 群 | 平 均 値 | 2.42 | 1.94 | 3.79 | 3.84 | 2.61 | 2.50 | 2.15 | 2.07 | | |
| S D | 0.79 | 0.82 | 0.86 | 0.91 | 0.86 | 1.08 | 0.98 | 0.94 | | | |
| n | 82 | 30 | 82 | 30 | 82 | 30 | 82 | 30 | | | |
| 性別主効果 (F) | | 6.47* | | 0.85 | | 0.34 | | 2.34 | | | |
| 態度主効果 (F) | | 1.52 | | 1.20 | | 6.16* | | 9.09** | | | |
| 交互作用 (F) | | 1.82 | | 0.25 | | 0.03 | | 4.31* | | | |

*** $p < .001$; ** $p < .01$; * $p < .05$; + $p < .10$

として強いことを表す。

(1) 父親の態度認知について

まず性別×「モデル」の分散分析結果をみていく。影響因の第I因子である「情報」については性別の主効果だけが有意 ($p < .01$) で

あり、男子より女子で得点が高い。第II因子の「個性」では「モデル」の主効果 ($p < .05$) と交互作用 ($p < .05$) が有意であった。交互作用のパターンをみると、女子では父親「モデル」の高群と低群間に差がないが、男子では

表11 職業決定影響因について母親の態度認知の分散分析結果

| | | | 職業決定因子 | | | | | | | | |
|-----------------------|-------------------|-----------|--------|------|-------------------|------|---------|------|-------------------|------|------|
| | | | 情報 | | 個性 | | 現実的要因 | | 身近モデル | | |
| | | | 女子 | 男子 | 女子 | 男子 | 女子 | 男子 | 女子 | 男子 | |
| 母親の 態度 認知 因子 | モ デ ル | 高 群 | 平 均 値 | 2.53 | 2.26 | 3.92 | 4.13 | 2.92 | 3.01 | 2.42 | 2.90 |
| | | S D | 0.81 | 0.81 | 0.79 | 0.77 | 0.83 | 1.11 | 1.04 | 1.00 | |
| | | n | 89 | 24 | 89 | 24 | 89 | 24 | 89 | 24 | |
| | 低 群 | 平 均 値 | 2.26 | 1.96 | 3.70 | 3.80 | 2.57 | 2.43 | 1.97 | 2.09 | |
| | S D | 0.72 | 0.82 | 0.85 | 0.92 | 0.89 | 1.05 | 0.88 | 1.05 | | |
| | n | 68 | 32 | 68 | 32 | 68 | 32 | 68 | 32 | | |
| | | 性別主効果 (F) | 5.40* | | 1.37 | | 0.03 | | 3.76 ⁺ | | |
| | | 態度主効果 (F) | 5.24* | | 4.36* | | 10.39** | | 16.06*** | | |
| | | 交互作用 (F) | 0.02 | | 0.16 | | 0.71 | | 1.32 | | |
| | 仕事 の 話 題 | 高 群 | 平 均 値 | 2.53 | 2.05 | 3.85 | 4.28 | 2.93 | 2.73 | 2.21 | 2.20 |
| S D | | | 0.78 | 0.80 | 0.80 | 0.80 | 0.81 | 1.30 | 0.91 | 1.19 | |
| n | | 70 | 20 | 70 | 20 | 70 | 20 | 70 | 20 | | |
| 低 群 | | 平 均 値 | 2.32 | 2.11 | 3.81 | 3.75 | 2.64 | 2.65 | 2.23 | 2.57 | |
| S D | | 0.77 | 0.84 | 0.80 | 0.85 | 0.90 | 1.00 | 1.07 | 1.04 | | |
| n | | 87 | 36 | 87 | 36 | 87 | 36 | 87 | 36 | | |
| | | 性別主効果 (F) | 7.36** | | 2.01 | | 0.39 | | 0.97 | | |
| | | 態度主効果 (F) | 0.30 | | 4.64* | | 1.62 | | 1.36 | | |
| | | 交互作用 (F) | 1.06 | | 3.45 ⁺ | | 0.50 | | 1.15 | | |
| 指示 的 態 度 | | 高 群 | 平 均 値 | 2.37 | 2.21 | 3.74 | 3.96 | 3.00 | 2.81 | 2.28 | 2.65 |
| | S D | | 0.80 | 0.82 | 0.76 | 0.93 | 0.95 | 1.13 | 1.04 | 1.20 | |
| | n | 72 | 34 | 72 | 34 | 72 | 34 | 72 | 34 | | |
| | 低 群 | 平 均 値 | 2.45 | 1.90 | 3.90 | 3.91 | 2.58 | 2.47 | 2.17 | 2.11 | |
| | S D | 0.76 | 0.81 | 0.87 | 0.76 | 0.75 | 1.06 | 0.96 | 0.83 | | |
| | n | 85 | 22 | 85 | 22 | 85 | 22 | 85 | 22 | | |
| | | 性別主効果 (F) | 8.06** | | 0.77 | | 0.98 | | 0.89 | | |
| | | 態度主効果 (F) | 0.85 | | 0.19 | | 6.83** | | 4.02* | | |
| | | 交互作用 (F) | 2.56 | | 0.68 | | 0.07 | | 1.69 | | |

*** $p < .001$; ** $p < .01$; * $p < .05$; + $p < .10$

低群よりも高群で「個性」得点が高かった。第Ⅲ因子「現実的要因」については「モデル」の主効果だけが有意($p < .05$)であり、低群より高群で高くなっている。第Ⅳ因子「身近モデル」でも「モデル」の主効果だけが有意(p

$< .001$)であり、低群より高群で「身近モデル」得点が高い。

次に性別×「指示的態度」の結果をみていく。「情報」では性別の主効果($p < .01$)と交互作用($p < .05$)が有意であった。性別による違

いは前述の通り男子より女子で「情報」得点が高いというものである。交互作用をみると、「指示的態度」高群では性差がないが、女子では低群でほぼ高群と同様の得点を示すのに対し、男子の低群では得点が低くなる。つまり男子の「指示的態度」低群が他の3群よりも低い「情報」得点を示している。「個性」ではどの効果も有意ではなかった。「現実的要因」と「身近モデル」ではともに「指示的態度」の主効果だけが有意(いずれも $p<.001$)であり、低群よりも高群で得点が高かった。

性別×「仕事の話題」では次のような結果が得られた。「情報」では性別の主効果だけが有意($p<.05$)であり、その方向は前述の通りである。「個性」ではどの効果も有意ではなかった。「現実的要因」では「仕事の話題」の主効果だけが有意($p<.05$)であり、低群より高群で高得点を得ている。最後に「身近モデル」については、「仕事の話題」の主効果($p<.01$)と交互作用($p<.05$)が有意であった。男女ともに「仕事の話題」の低群より高群で「身近モデル」得点が高いが、女子ではその差は小さいのに対し、男子では大きな差を示している。

(2) 母親の態度認知について

まず表11で性別×母親「モデル」の分散分析の結果をみていく。「情報」については性別の主効果($p<.05$)と「モデル」の主効果($p<.05$)が有意であり、交互作用は有意ではなかった。性別については前述の通りであり、「モデル」の主効果については低群よりも高群で高得点であった。「個性」では「モデル」の主効果($p<.05$)だけが有意であり、低群より高群で「個性」得点が高かった。「現実的要因」と「身近モデル」でも「モデル」の主効果($p<.001$)だけが有意であり、低群より高群で得点が高かった。

性別×「仕事の話題」については、まず「情報」で性別の主効果($p<.01$)がこれまでと同様にみられた。「個性」では、「仕事の話題」

の主効果($p<.05$)が有意であり、低群より高群で「個性」得点が高い。「現実的要因」と「身近モデル」ではどの効果も有意ではなかった。

最後に性別×「指示的態度」の結果をみてみる。「情報」では性別の主効果だけが有意($p<.01$)であり、その方向は前述の通りである。「個性」ではどの効果も有意ではなかった。「現実的要因」と「身近モデル」では「指示的態度」の主効果だけが有意(それぞれ $p<.01$, $p<.05$)であり、低群より高群で得点が高かった。

IV 考察

1. 職業未決定尺度の因子構造

下山(1986)では大学生に職業未決定尺度を実施したところ、未決定状態は「未熟」、「混乱」、「猶予」、「模索」、「安直」の5次元の構造をもち、これに「決定」を加えた6因子でこの尺度が構成されることをみいだした。鹿内(2004)では、項目数を若干減らしてこの尺度を高校生に実施した結果、「決定」、「混乱」、「意欲の低さ」、「非現実感」、「模索」、「安直」の6因子が得られた。本研究でも6因子がみいだされ、それぞれ「未決定」、「混乱」、「安直」、「意欲の低さ」、「決定回避」、「模索」と名付けられた。

下山(1986)では「未決定」と「決定」が分離しているのに対し、本研究では1つの因子にまとまり、他方下山では「混乱」でまとまっていた項目が、本研究では「混乱」と「意欲の低さ」に分かれた。表1でそれぞれの項目をみると、不安や自己効力感の低さを示す項目と職業への構えの低さを表す項目とに分離しており、それぞれ未決定状態の異なった様態を示すものと考えられる。

本研究で得られた6因子は、基本的には高校生に行った鹿内(2004)と同様の構造であり、「決定」、「混乱」、「安直」、「模索」の4因子

についてはほぼ共通の項目で構成されていた。両者で違いがみられたのは、「非現実感」と「決定回避」である。高校生では「自分が働いている姿が思い浮かばない」、「職業といわれてもピンとこない」、「職業を最終的に決定するのはまださきのことである」という内容の項目がまとまっており、職業をまだ現実的な問題としてとらえていないことから「非現実感」因子と名付けたが、本研究の大学生では「職業につくことはそれほど重要なことではない」、「できることならいつまでも好きなことをしたい」、「実現できないような職業ばかり考えている」という3項目が1つの因子を構成しており、職業決定あるいは職業について考えることからの逃避を表しているため、「決定回避」と名付けた。

この違いはやはり職業決定をすべき時期が近いかどうかによるものであろう。多くの高校生にとって目の前にあるのは大学進学であり、職業選択はその先にあるもので差し迫った問題ではないのに対し、大学生ではごく近い将来の問題であるため、職業決定が順調に進まない場合にそこからの逃避がなされると考えられる。

2. 親の態度認知と職業未決定との関連性

父親を尊敬し、生き方のモデルとし、父親の仕事を理解しており、父親とのコミュニケーションもなされていると認知している父親「モデル」は子ども（大学生）の職業未決定状態と関連していた。分散分析の結果では、モデルとする傾向の強いもののほうが「未決定」、「意欲の低さ」、「決定回避」が弱く、性別との交互作用はみられなかった。しかし重回帰分析の結果では、男子においては「混乱」、「意欲の低さ」、「決定回避」で父親「モデル」が有意な負の寄与をしており、「未決定」でも有意な傾向の負の寄与がみられたが、女子ではどの未決定因子も父親「モデル」と関連していなかった。大学生においても同性の親

からの影響を受けやすく、父親が職業人として望ましいモデルとなり、また父一息子間のコミュニケーションがスムーズになされている場合、男子の職業意識が望ましい発達を示すことが明らかにされた。

職業決定影響因と親の態度認知との関係についてもこれと一貫する結果が得られた。自分の能力や適性、ライフスタイルに合うことを職業決定で重視する態度である「個性」について、女子では父親「モデル」得点の高低が関連していなかったが、男子では父親「モデル」得点の高いもののほうが「個性」を重視するという結果が得られた。「個性」の重視は積極的な望ましい職業選択であり、職業人として好ましい生き方をしている父親を身近にみてアドバイスなども受けていれば、職業選択はより積極的なものとなるであろう。

好ましい父親「モデル」が同性である男子の職業意識に好ましい影響を一貫して与えているのに対し、母親「モデル」は女子と男子に対して異なった影響を与えていた。重回帰分析の結果では、女子では母親「モデル」が「未決定」、「意欲の低さ」、「決定回避」に対して有意な負の寄与を示し、「混乱」に対しても有意な傾向の負の寄与をしていた。しかし男子では逆に母親「モデル」が「混乱」、「決定回避」および「模索」に対して有意な正の寄与をしていた。これと斉合する結果は分散分析でも得られ、「混乱」と「決定回避」において性別と母親「モデル」高低の交互作用が有意となった。相互作用のパターンは、女子では母親「モデル」の低群が高群より「混乱」と「決定回避」が強い、もしくは両者に差がないのに対し、男子では低群より高群のほうが「混乱」や「決定回避」が強いというものであった。

女子の結果は男子の父親モデルの結果と一致したもので、同性の親の好ましいモデリングが子どもの職業意識を望ましい方向に発達させることを示すものである。しかし男子と

母親の間ではこのような望ましいモデリングの影響とは逆に、母親をモデルとし母親とのコミュニケーションを密にとっている男子は、職業決定について不安をもち、効力感をもたず、決定を回避しようとする傾向が強いのである。上述のように、女子の父親「モデル」についての結果はこのような職業意識の発達を妨げる影響を示していないので、異性の親をモデルとした時に「混乱」や「決定回避」に陥りやすいと考えることはできない。男子と母親との間の特有の関係とみなすことができる。父親は一般的に職業人としての役割をもっているため、異性の子どもの場合であっても父親をモデルにすることは職業意識の発達を妨げるものではない。しかし母親の場合はフルタイムの職業人であるケースが少ないため、家庭人としての母親をモデルにすることは、男子にとって職業意識の発達に妨害的に作用すると考えることができる。高校生の進学志望動機を検討した淵上(1984)において、母親から影響を受けていると認知している者では「親が勧める」、「親孝行のため」といった「家族への配慮」動機が強いという結果が得られたが、これは本研究の結果と斉合する方向のものである。

また男子が母親と緊密な関係をもつことは、モデリングというよりも母親への依存的な関係とみなすことができる。エリクソンがアイデンティティ理論で論じているように、青年期にはモラトリアムを通してアイデンティティの確立/拡散の危機を解決していくことが重要な課題であるが、職業決定はこのアイデンティティの確立にとって重要な要素の一つである。近年、このアイデンティティの確立が遅れ、重要な決定を先延ばしする青年が増加していることが問題にされてきているが、その原因の一つに母子とくに母と息子との密着があり、それが子どもの自立への不安、その結果としての自立の遅れをもたらしていることが指摘されている。本研究での男子の母親

「モデル」の高得点を母子の密着を示すものと考えれば、本研究の結果は、男子にとって母親への依存は職業をもって自立していく構えを妨害するものであることを明らかにしていると解釈できる。

3. 職業人イメージと職業未決定との関連性

一般的に職業人イメージと職業未決定との関連性は強いものではなかったが、「軽快さ」のイメージにおいて関連性がみられ、また関連性の方向が性別によって異なっていた。「未決定」、「意欲の低さ」、「混乱」、そして「決定回避」で性別と「軽快さ」高低の交互作用が有意または有意な傾向にあったが、交互作用のパターンはすべて共通しており、女子では「軽快さ」のイメージが低いほうで職業未決定傾向が強いのにに対し、男子では逆に「軽快さ」イメージが高いほうで未決定傾向が強くなっていた。重回帰分析の結果もこれと一致するものであり、女子では「軽快さ」イメージが「決定回避」、「未決定」、「混乱」に対して負の有意、または有意な傾向の寄与をしていたが、男子では「混乱」と「模索」に対して正の寄与を示していた。

職業人イメージの他の2因子との相関係数をみると、女子では「重厚さ」との間で.206、「落ち着き」との間で-.237で、いずれも有意な相関であったが、男子ではそれぞれ.038と-.086であり、無相関であった。「軽快さ」はやわらかい、明るい、軽い、リラックスしたという4項目から構成されているが、女子では「重厚さ」との正の相関がみられたことから、単なる軽さではなく、明るさや柔軟さといった好ましい意味内容として受け取られているが、男子では女子とは異なった意味で捉えていると推測される。しかし「軽快さ」の意味内容の性差については、本研究ではこれ以上の考察の材料がなく、今後の検討課題である。

4. 職業未決定状態と職業決定影響因における性差

全般的にみて性差はあまり大きくはなかったが、職業未決定の「意欲の低さ」と職業決定影響因の「情報」で性差がみられ、男子より女子で意欲が高く、情報が影響すると認知する程度が高かった。安達（1998）は大学生の就業動機尺度の作成を試みているが、就業動機の1つの因子である「探索志向」得点で性差をみだし、男子よりも女子、とくに結婚や出産があっても仕事の継続を望んでいる女子で探索志向が強いことを明らかにしている。探索志向は、就こうと考えている職業についての情報を積極的に得ようとしたり、職業に必要な準備や努力をしようとする傾向のことである。本研究での「情報」は、教員や先輩からのアドバイスや情報、大学での授業、パンフレットやインターネットなどからの情報であるが、これらが職業決定に影響すると認知することは、逆にこれらから情報を得ようとする傾向が強いことを意味すると考えられる。そうであれば、本研究で得られた女子での意欲の高さと決定因としての情報の強さは、安達（1998）の結果と一致するものということができる。

〔引用文献〕

- (1) 安達智子 1998 大学生の就業動機測定の試み 実験社会心理学研究, 38, 172-182
- (2) 安達智子 2001 進路選択に対する効力感と就業動機, 職業未決定の関連について—女子短大生を対象とした検討— 心理学研究, 72, 10-18
- (3) 淵上克義 1984 進学志望の意思決定過程に関する研究 教育心理学研究, 32, 59-63
- (4) 小久保みどり 1998 大学生の職業選択・キャリア開発へのモチベーションとキャリア志向 立命館経営学, 37, 1-20
- (5) 鹿内啓子 2004 女子高校生の進路選択に関わる要因 北星学園大学文学部北星論集, 41,

13-28

- (6) 下山晴彦 1986 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, 34, 20-30
- (7) 下山晴彦 1990 青年期後期と若い成人期—男性を中心に。小川捷之・斎藤久美子・鐘幹八郎（編）ライフサイクル（臨床心理学体系3）, 金子書房
- (8) 浦上昌則 1995 学生の進路選択に対する自己効力に関する研究 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科—, 42, 115-126

[Abstract]

A Study of Parent-Adolescent Relationships and Worker Image Related to Career Indecision of College Students

Keiko SHIKANAI

The career decision of college students is a very important developmental step toward their identity achievement. This study investigates the parent-adolescent relationship and worker image with career indecision of college students. A Career Indecision Scale, Worker Image Scale, and Parent-adolescent Relationship Scale were administered to 213 college students. The Career Indecision Scale was divided into six subscales : Indecision, Confusion, Easiness, Low Motivation, Avoidance of Decision, and Exploration. On the whole, positive modeling after the parent of the same sex promoted the career decision status of students. However, for male students, modeling after their mother was related to Confusion and Avoidance of Decision. This result was interpreted to mean that for male students modeling after their mother means adhesion to mother that hinders independence from parents and ego-development. A "Light" image of workers was negatively related to Indecision and Low Motivation in female students, but the opposite relations were found in male students. "Light" may imply "Free" in female students, but on the other hand "Light" may imply "Easygoing" in male students.

Key words : Career Indecision, College Students, Parent-adolescent Relationship, Worker-image